

[畑作関係]

1. 落花生マルチ栽培の改善について

1. 背景と特徴

落花生のマルチ栽培は昭和45年度から普及に移され、今日まで6年を経過したが、この間、栽培地は北上し、品種も小粒種から大粒種へと移った。

その間、普及の過程で、栽培法に関しても多くの問題点が指摘され、低温年次における低収要因の解明、とくに出芽精度の向上改善についての研究開発が要望されてきた。

このような背景から鋭意試験を重ねてきたが、下記事項について知見が得られたので、栽培法の改善事項として、普及上の参考に供することとした。

またこれらの新しい研究成果をもとに、一部試験例のない事項については主産地の技術を取りいれて、「マルチ栽培の手引き」を作成したので併せて参考に供することにする。

- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 種子消毒について | 埴境部 |
| 2. 播種期について | 技術部、県北分場 |
| 3. 栽植密度について | 技術部 |
| 4. 落花生マルチ栽培の手引き | |

1-1 種子消毒法について

落花生は種子消毒でこれに付着する菌叢を減少させ、発芽量を高めうることが知られている。従来はMMC、EMP等の水銀剤の使用禁止に伴って代替剤が必要となり、検討した結果チユウラム水和剤の粉衣消毒法が有効であるとの知見が得られたので参考に供したい。

1. 技術内容

種子消毒

使用薬剤：チユウラム水和剤（TMTD水和剤）

使用方法：播種直前に種子重量の0.2～0.3%を粉衣する。

2. 普及上の留意点

- (1) 均一に粉衣されるようよく混合する。小規模の場合はビニール袋（例、肥料袋）等に所定量の種子と薬剤を入れ、よくかく拌すると均一に粉衣される。この場合1回に使用する種子量は、袋容量の50～70%が好適である。
- (2) 本剤は、目鼻を刺激するから、粉衣に際しては粉末が飛散しないよう注意する。

3. 試験成績の概要

落花生の種子消毒に関する試験

小粒量～白油7-3

ともに外観上健全と思われるものを供用。

操 作：粉衣後直ちに径12cmシャーレにろ紙をしき、殺菌水を注入して湿室とし、
これに各々25粒ずつ播種した。1区につき2コのシャーレを使用した。
播種後28℃採光式定温器中に保存した。

調 査 法：播種1週間後に種子上に発生した菌種と発育粒数を調査した。

〔試験結果〕

第2表 TMTD(80%)の粉衣法による消毒効果

処 理 区 別	総 粒 数	発 芽 粒 数	発 芽 率	菌 種 別 発 生 粒 数				
				Penicilli- um 属	Rhizopus 属	Trichothe- cium 属	Clado- sporium 属	
大粒種	0.2%粉衣	50	37	74.0 ⁽²⁾	0	0	0	0
	無 処 理	50	36	72.0	11	12	0	1
小粒種	0.2%粉衣	50	40	80.0	6	0	0	0
	無 処 理	50	31	62.0	23	18	7	0

これによれば小粒種の処理区でPenicillium属の発生がややめだつたほかは完全に殺菌効果がみられ、また発芽率も上昇していた。

③ TMTD(80%)の適正粉衣量に関する試験

〔試験方法〕

供用品種：大粒種～関東9号(ワセダイリュウ)

小粒種～白油7-3

操 作：各区100gを供用し、これに対し薬量を0.1%、0.15%、0.2%、
0.25%になるように秤量して、300ml容量のビーカーに入れ、種子とともによく混合した。かく拌混合後ビーカー底部に残った薬液をていねいに採集し、再び秤量して粉衣前の重量に対する比率を求めた。調査は2回反復した。

〔 試験結果 〕

第 8 表 粉衣量と種子に対する付着率 (種子 100g 当たり)

粉衣量	粒の大小	当初投入量	残量	付着率
0.1%粉衣区	大粒種	0.1g	0g	100%
	小粒種	0.1	0	100
0.15% "	大粒種	0.15	0	100
	小粒種	0.15	0	100
0.2% "	大粒種	0.20	0.045	77.5
	小粒種	0.20	0.020	90.0
0.25% "	大粒種	0.25	0.083	66.8
	小粒種	0.25	0.060	76.0

適正粉衣量は 0.15 ~ 0.2% 程度とみられる。薬量は小粒種で多くを必要としたが、大粒種との差は微量であった。

(3) 主要成果の具体的データ

省略

4. 残された問題点

なし

5. 参考資料

(1) 昭和 49 年度病害虫防除に関する試験成績

岩手農試 (昭 50, 3)

(2) 渡部茂、佐藤忠士：らつかせいの種子消毒法と効果、東北農業研究 17 号 P. 130 ~

132 (昭 50, 10)

1-2 落花生の播種期について

1. 技術内容

普及当初の播種期は、落花生の生育下限温度を 15℃ におき、5 月 20 日以降を目安とした。

しかし、落花生は本来、開花登熟期間が長く、とくに無霜期間の短い北東北では、極早生のタチマサリでも作季中は極めて窮屈である。初期生育を促進し、開花結莢を早める目的で 5 月 5 日から 5 月末日までの範囲で播種期試験を行った結果、低温年次 (昭 46、49 年) における 5 月 20 日以降の播種は、子実の充実が著しく劣り、また、高温年次 (昭 48、50 年) でも 5 月 20 日播きは減収傾向がみられ、5 月末日の播種では 5 月 10 日播きより

約20%減収し、播種期が早い程多収を示した。

このことから多収を得るための播種適期は5月上旬にあるが、降霜とのかねあいから出現頻度80%を満たす安全限界をみて、播種期の早限は滝沢以北で5月10日、盛岡以南が5月1日頃としたい。なお、播種晩限は5月15日～20日頃とする。

2. 普及上の留意点

- (1) 低温時の播種は発芽勢を良くするため2粒播種きとする。
- (2) 雨の日の播種は発芽障害がしやすいので、たとえ遅れても避けた方がよい。
- (3) 霜の発生は群発性で、地形その他の条件で被害の度合が著しく異なるので、霜のミチなどには注意しなければならない。
- (4) 早播きでは必ず種子消毒を行うこと。

3. 試験成績の概要

- (1) 試験課題名 落花生の生育相に関する試験
- (2) 試験年次および場所 昭和46～50年 岩手農試技術部
昭和48年 岩手農試県北分場
- (3) 試験方法 5月上旬から下旬まで4時期に分けて播種し、出芽率、開花および登熟状況の追跡調査を行った。
- (4) 試験結果

昭和48年度は高温乾燥年次であったが、本場、県北ともに早播きが高収で、晩播区は県北で5月24日播き、本場では5月31日播きで20%前後の減収となった。(第1、第2)。

昭和49年度は出芽期の気象が良好で出芽は順調であったが、中後期の気象は不良で、全般に低収であった。なかでも、5月19日以降の晩播区が著しく減収した。(第3表)。

播種期と出芽の関係であるが、過去6ヶ年の全試験の結果では、マルチ栽培での出芽期間は最短で9日、最長で16日で一般には12日前後で出芽した。早播き区は若干出芽期間が長く、出芽率も幾分劣ったが、2粒播きすることによって実害のない程度の欠株におさえることができた。(第4表)

以上のことから、早播きが出芽に障害も少なく、多収となることが知られたが、霜害に対して多少の不安が残った。

第5、6表は降霜を調べたものであるが、出現頻度80%を満たした期日から、出芽期間(約12日)をさかのぼった日が安全播種期と考えられる。なお、滝沢では47年6月1日に5月13日播種で発芽後5日目の第3葉抽出始期に、また釜米では48年5月25日出芽後3日目に降霜にあってはいるが、障害は認められなかった。

(5) 主要成果の具体的データ

第1表 播種期別菜数の推移と収量

品種 タチマサリ

(48本場)

項目 播種期	開花期 (月日)	株当たり菜数の推移							子実重 (Kg)	百粒重 (g)
		7/16 菜	7/19 菜	7/23 菜	7/26 菜	7/30 菜	8/2 菜	8/5 菜		
5月10日	6.26	1.2	2.6	5.0	6.4	20.4	28.2	31.4	42.5	96.7
5月17日	6.28	0.4	4.0	4.4	7.2	21.4	24.5	25.8	40.7	96.3
5月24日	7.1	0	1.0	1.4	5.6	16.0	23.8	25.6	40.5	92.6
5月31日	7.5	0	0	0.8	3.4	17.0	17.6	18.2	34.9	78.2

第2表 播種期別菜数の推移と収量

品種 タチマサリ

(48 県北分場)

項目 播種期	発芽期 (月日)	発芽日数 (日)	開花期 (月日)	菜実重 (Kg)	子実重 (Kg)	収量比 (%)	上実 百粒重 (g)
5月8日播	5.22	14	6.26	56.8	38.8	105.7	85.4
5月16日播	5.29	13	6.30	53.1	36.7	100.0	87.0
5月24日播	6.4	11	7.3	46.3	31.1	84.8	81.7

第3表 播種期と生育収量

品種 タチマサリ

(49本場)

項目 試験区	開花期 (月日)	播種期から 開花までの 日数 (日)	株当たり開花数花		当り			
			7月20日 まで	終花 まで	菜実重 (Kg)	む歩き 実合 (%)	子実重 (Kg)	指数 (%)
1 透明5月7日播	6.13	37	83	189	48.6	71	34.3	107
2 透明5月13日播	6.19	37	71	194	45.7	70	32.1	100
3 透明5月19日播	6.24	36	53	205	41.4	66	27.3	85
4 透明5月24日播	6.27	34	51	186	36.7	65	23.7	74

第4表 播種期と出芽の関係

(49. 本場)

試験区	項目	出芽始	出芽期	出芽期	出芽日数	積算地温	出芽率	欠株歩合
		(月日)	(月日)	(月日)	(日)	(℃)	(%)	(%)
1	透明 5月 7日播	5.15	5.19	5.20	12	251.3	92.0	2.4
2	透明 5月 13日播	5.23	5.24	5.25	11	253.0	96.8	0.3
3	透明 5月 19日播	5.28	5.30	5.31	11	257.1	94.7	0
4	透明 5月 24日播	6. 1	6. 3	6. 4	10	249.3	96.5	0
5	黒マルチ 5月 13日播	5.25	5.27	5.29	14	—	84.8	1.3
6	無マルチ 5月 13日播	5.27	5.30	6. 1	17	—	78.8	6.9
7	無マルチ 5月 19日播	6. 2	6. 4	6. 5	15	—	88.5	3.2

第5表 各地の終霜日比較

年次	場所	軽米	福岡	好華	滝沢	盛岡	花巻	千厩	江刺
	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日
50	5.11	5.11	5.22	5.11	5. 8	5. 8	5. 8	5. 8	5. 5
49	5. 7	5. 7	5.11	5. 7	5. 7	5. 3	5.13	5.13	5. 3
48	5.25	5.24	5.13	5.11	5. 5	5. 5	5.25	5.25	5. 5
47	5.28	5.28	6. 1	6. 1	4.22	4.10	6. 1	4.22	4.22
46	5.18	4.28	5. 6	5. 9	5.10	5.18	4.28	5.18	5.18
平均	5.18	5.13	5.17	5.14	5. 4	5. 3	5.15	5. 4	5. 4

第6表 最近12年間の終霜(1964~75年)

場所	項目	終霜		最終出現日			
		霜		1℃以下気温		3℃以下気温	
		期日	同左の最低気温	期日	同左の最低気温	期日	同左の最低気温
米	最	5月26日	-1.0℃	5月 1日	0.2℃	5月12日	0.9℃
	最	6. 12	-0.4	6. 12	-0.4	6. 17	2.9
	平	5. 16	-0.4	5. 13	0.4	5.25	1.8
	際	(12.2)	1.1	(11.2)	0.5	(11.2)	1.0
米	出	5.22	—	5.24	—	5.28	—
	(80%)						

場所	項目	終 霜		最 終 出 現 日			
				1℃以下気温		3℃以下気温	
		期 日	同 左 の 最 低 気 温	期 日	同 左 の 最 低 気 温	期 日	同 左 の 最 低 気 温
滝 沢	最 早	4.26日	-0.5℃	4.23日	-3.6℃	5.7日	0.2℃
	最 晩	6.12	3.3	5.22	-0.2	6.1	1.7
	平 均	5.14	0.5	5.7	-0.3	5.13	1.5
	標 準 偏 差 (13.4)		1.5	(8.3)	1.5	(7.8)	0.9
	出 現 頻 度 (80%)	5.23	-	5.11	-	5.23	-
盛 岡	最 早	4.22	-0.4	4.19	-0.8	4.25	0.0
	最 晩	5.24	3.9	5.7	1.0	5.22	1.8
	平 均	5.5	1.5	4.29	0.2	5.5	1.7
	標 準 偏 差 (8.3)		1.3	(6.5)	0.6	(12.4)	0.8
	出 現 頻 度 (80%)	5.8	-	5.3	-	5.11	-
江 刺	最 早	4.22	-1.4	4.15	0.0	4.20	2.8
	最 晩	5.18	2.6	5.13	0.0	5.22	1.6
	平 均	5.6	1.6	4.29	0.1	5.9	2.3
	標 準 偏 差 (7.2)		1.4	(9.1)	0.8	(6.9)	0.5
	出 現 頻 度 (80%)	5.10	-	5.7	-	5.13	-

4. 残された問題点

降霜の長期予測と霜害の回避

5. 参考資料

東北農業研究第17号、気象月報、昭39～50年6月

1-3 落花生の栽植密度について

1. 技術内容

従来、白油7-3を用いたマルチ栽培は9215型のフィルムを使って、 m^2 当たり13株が最適密度であった。新しい品種タチマサリの最適密度は1本立て m^2 当たり16.7株、2本立て11.5株であるが、1株おき2本、すなわち9215型フィルムを用い、2粒蒔いて1株おきに間引く m^2 当たり18.2本で、1本立と2本立の間となり、実際上も最多収を示している。

したがって現在のフィルム規格にそくした栽植様式をとるならば、今までどおり畦巾は110cmとして、発芽精度を高める上からも2粒播きとして、1株おきに間引きして、1・2本立にする。また労力のない場合はそのままでもよい。

最適規格のフィルムを求めるならば、1粒播きは9212型、2粒播きは9218型が適正である。

2. 普及上の留意点

- (1) 2粒播きするだけの種子量がない場合は、1粒と2粒を交互に播く。
- (2) 畦巾は110cmよりせばめない。せばめると肩の部分が狭くなり、落花生の子房柄が畦間の裸地へすべりこんでしまう。
- (3) フィルムの節約のため畦間を更に広げる場合は栽植本数を確保するために必ず2本立とする。
- (4) 密植栽培は病害が発生しやすいので防除を徹底する。

3. 試験成績の概要

- (1) 課題名 栽植密度様式に関する試験
- (2) 試験年次および場所 昭和48～50年 岩手農試技術部
- (3) 試験方法

昭和48年度は2粒まいて1本立、2本立、1株おき2本立の3区

昭和49年は8212、9215、9218、9224、9230型のフィルムと、畦巾110cmと120cm、播種粒数と組合せて供試した。

(4) 試験結果

落花生の栽植密度は従来から9215型のホーリーシートを用いて、畦巾110cmにして m^2 当たり13株前後で栽培してきたが、小粒種の白油7-3は第1図に示したように、計算上から13.9株で m^2 当たり葉数は最大となって、9215型の規格がこの品種にほぼ適合する。

すなわち、収量構成要素に占める葉数の位置からみて妥当な栽植密度であった。大粒種タチマサリについて同様の試験を行った結果、完全葉数確保の最適密度は個体当たり葉数と、 m^2 当たり個体数の積から求められ、1粒播きでは16.7本、2粒播きでは22.9本、1.2粒まきで18.6本の値が得られた(第2図)

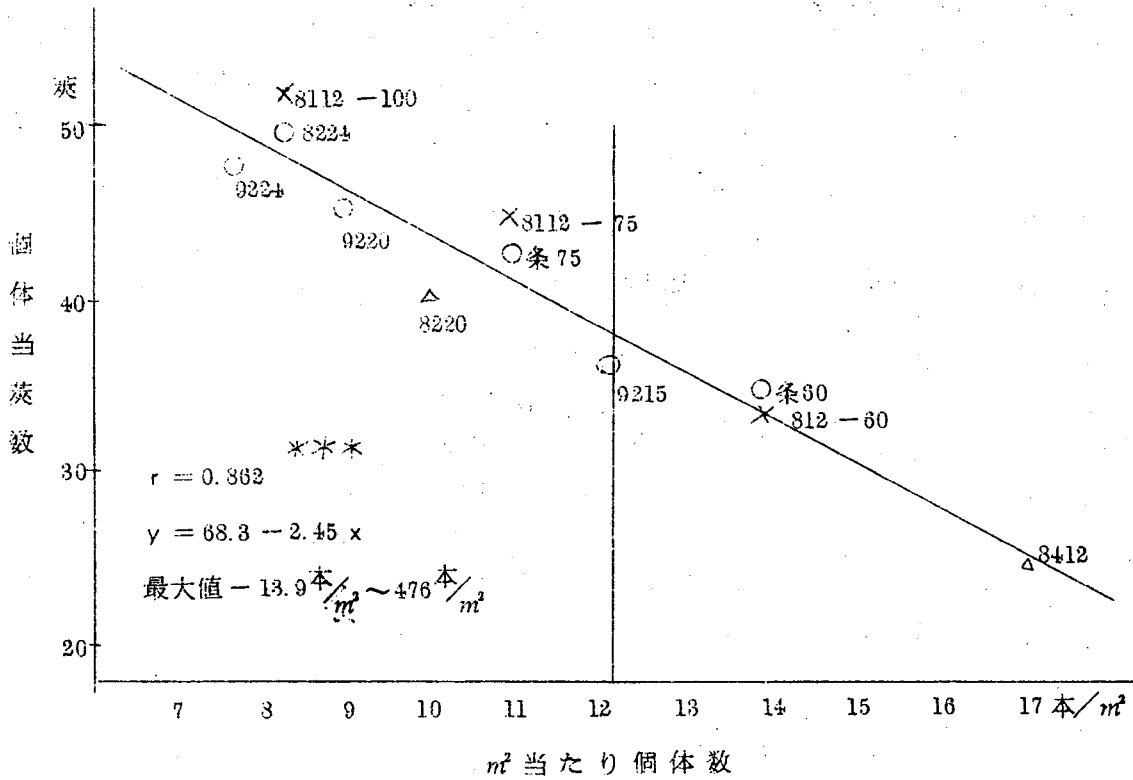
なお、実収量では1.2本交互立て(m^2 当たり13.2本)区が最多収で、前年度の結果も同様であった。(第1、2表)

また、フィルム節減を目的に畦巾を10cm広げた試験区は、いずれの区もわずかであるが減収した。

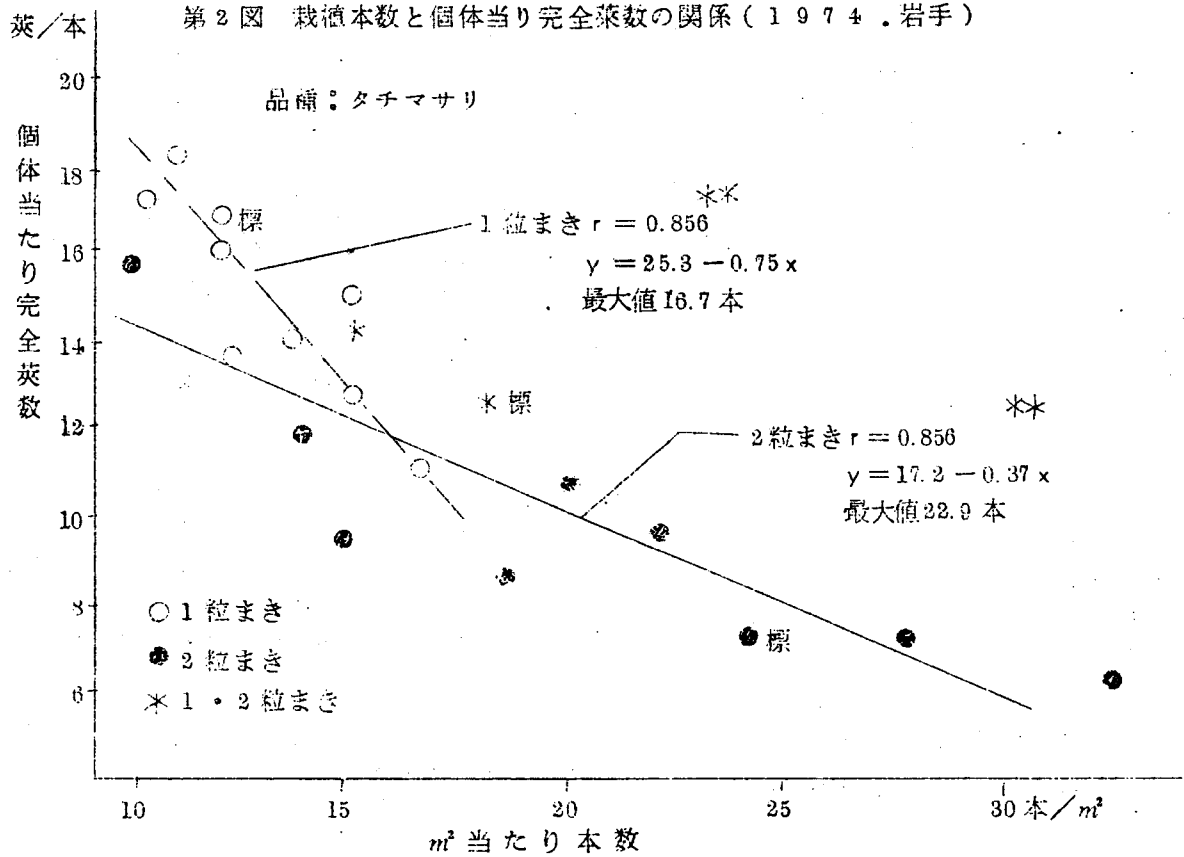
以上のことからタチマサリの栽植密度は完全充実葉でみた場合、1粒播きで16.7株、2粒播きで22.9本すなわち11.5株が1.2粒播きでは18.6本立の12.4株が最も多収で、ほぼ最適密度に近いと考えられ、実収量においてもこれに近い栽植密度で多収であった。

(5) 主要成果の具体的データ

第1図 栽植本数対個体当葉数 白濁7-3 (1970年)



第2図 栽植本数と個体当り完全葉数の関係 (1974 . 岩手)



第1表 栽植本数と生育収量(48年本場)

区名	主茎長 (cm)	最長 分校長 (cm)	一株当り				α当 子実重 (kg)	上実 百粒重 (g)	子実重比 (%)
			茎葉重 (g)	完全葉 葉/株	不完全葉 葉/株	葉重 (g)			
2本立	46.6	52.0	68.8	20.7	8.4	53.0	43.3	104.8	100
1・2本立	43.2	56.5	84.5	18.9	7.7	57.8	46.1	108.2	106
1本立	46.9	53.1	61.0	18.4	5.8	50.5	40.6	98.1	94

第2表 栽植様式密度と収量(49年本場)

区 番号	調査項目 試験区	m ² 当り 本数	個体当り		子実重 (kg/α)	上実重 (kg/α)	標準比 (%)
			総葉数	完全 上葉数			
1	8212-100-1粒	16.7	24.8	11.3	30.7	28.3	111
2	9212-100-1粒	15.2	22.6	12.9	30.2	27.9	109
3	9212-120-1粒	13.9	19.2	14.0	28.0	26.0	102
標	9215-110-1粒	12.1	28.2	16.9	28.0	25.5	100
5	9215-120-1粒	11.1	28.8	18.2	27.9	25.4	100
6	9218-110-1粒	10.1	29.6	17.1	26.2	23.9	94
7	モデル110-10-1粒	18.2	20.6	13.4	33.5	30.1	118
8	モデル110-15-1粒	12.1	30.2	16.1	28.1	26.1	102
9	8212-100-2粒	33.3	12.0	6.3	29.3	27.2	107
10	9212-120-2粒	27.8	9.8	7.1	30.1	26.9	105
11	9215-110-2粒	24.2	14.4	7.2	29.7	27.5	108
12	9215-120-2粒	22.2	17.9	9.5	28.6	26.8	105
13	9218-110-2粒	20.2	21.3	10.7	30.7	27.8	109
14	9218-120-2粒	13.6	19.4	8.6	28.3	25.7	101
15	9224-110-2粒	14.8	27.1	9.1	21.1	25.3	99
16	9224-120-2粒	13.3	24.6	11.9	28.4	24.7	97
17	9230-110-2粒	12.1	25.3	13.7	27.9	24.6	97
18	9230-120-2粒	11.1	30.6	15.9	26.6	23.9	94
19	9215-110-1.2粒	18.2	19.1	12.7	31.6	29.4	115
20	9218-110-1.2粒	15.2	22.0	14.7	28.8	26.0	102

(例) 9218-120-2粒 はフィルム用90cm、2は条数、18は株間、120は畦巾、2粒は1穴播種粒数を表す。

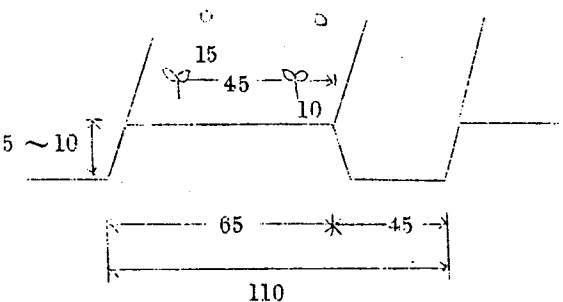
4. 残された問題点 特になし

5. 参考資料 日本作物学会東北支部会報(1972)

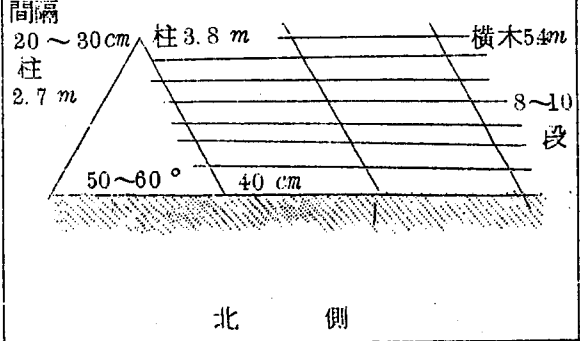
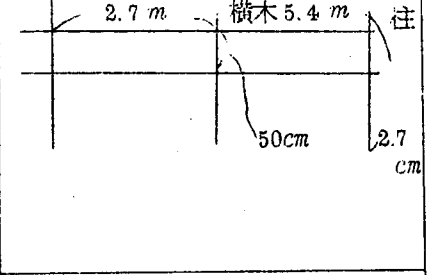
1-4 昭和51年度 落花生栽培の手引き

昭和50.12.23

岩手県

耕種概要		
品 種	タチマサリ（関東30号）	<ul style="list-style-type: none"> • 極早生の良質大粒種 • 汚斑病と灰色かび病の発生に注意を要する。
種子の準備	種子量は上菜で10アール当り20~30Kg （1・2粒播き20Kg、2粒播き30Kg） 種子は播種の直前に菜をむく。	発芽率90%以上の種子を用いる。 種子用の土菜はとくに乾燥を良くし、保管は過湿に注意する。
施 肥	施肥量は10アール当たり成分で窒素1~3Kg、 燐酸20Kg（ただし火山灰土以外は12Kg） 加里10Kg、消石灰80Kg 堆厩肥1,000~1,500Kg 良く腐熟した堆厩肥を施してからできるだけ 深く耕起する。金肥は全面施肥後にかく拌整地する。	肥沃な野菜畑などは窒素を減らす 消石灰はフィルム張りの直前に床面に散布しても良い。
作畦・設覆	<p>〈作畦〉（cm）</p>  <p>畦巾は110cm、畦の高さは5~10cm 株間15cm、2条、栽植株数は10アール 当たり12,000株</p> <p>〈設覆〉 フィルムは9215規格の透明で除草剤 （プロメトリン）の入ったサツソーシート （PHS）を用い、床面を均平にして フィルムが密着するように張る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • マルチャーを使うと畦巾100cmでも設覆できるが、手作業ではどうしても肩の部分が狭くなり易く肩が狭いと子房柄がずれて入るので畦巾は110cmとする。 • 風の強いところでは畦を低くして肩の土を多目にしてフィルムをおさえる。 • 設覆はおそくとも播種5日前に終るようにする。 フィルムの密着不良は雑草が多発するばかりでなく昇温効果も劣る。

耕種概要		
播種	<p>播種期は県南部5月1日～5月20日 県中、北部5月10日～5月15日</p> <p>タネバエ防除のために植穴にダイアジノン粒剤、または粒剤2Kgか、VC粒剤-3を2Kg施用する。</p> <p>種子消毒はチウラム水和剤(80%)を種子重量の0.2%粉衣する。 播種は鎌まきで深さ3～4cmにして種子は横におく。</p> <p>○1株の播種数は2粒、種子量の少ない場合は1株おきに2粒まく。 ○栽種密度は9215型マルチで10㎡当たり2本立てでは2万4千本、1-2本立てが1万8千本。</p>	<p>霜害の発生し易いところで、やや遅目にまくほかは、できる限り早播きする。</p> <p>ベンレート・T水和剤を用いても可 縦でも良いが逆さまにまくと発芽しにくい。</p> <p>2粒まきでは出芽後1株おきに間引き1・2本立とする。また7日目頃に播種穴が湿っていて熟れ目のないときは発芽しないことが多いから追まきする。</p>
雑草防除	<p>畦面はサツソーシート(PHS)で防除し、畦間と播種穴の部分には播種直後(3日以内)にトレフアノサイド乳剤、10アール当たり100ℓを水30ℓに希釈して散布する。</p>	<p>○水の不便な場合はトレフアノサイド粒剤2Kgを畦間のみに散布する。 ○スエップ粒剤2Kg、またはスエップ水和剤400gでも可 ○なお、薬量は畦間を4.5cmとして計算する。</p>
病害虫防除	<p>○汚斑病、灰色かび病等には開花初期から、10日間隔に3～4回ダニコール600倍、液160ℓ散布、またはトップジンM1500倍液160ℓ散布 ○根腐病、黒根病には硫黄粉剤4Kg散布 ○ヨトウムシの防除はエルサン乳剤1000倍液120ℓを散布する。</p>	<p>灰色かび病は冷涼多雨で多発する。</p>

耕種概要	備考
<p>収穫、乾燥</p>	<p>○収穫期は県南部10月1日～10日 県中北部9月25日～10月5日</p>
<p>○収穫はリフターを使用する。</p> <p>片屋根式架の組み方</p> 	<p>降霜があったら適期にかかわらず、直ちに掘取ること。降霜後は極端に落ち葉が多くなる。</p> <p>リフターを使用すると引き抜き抵抗(約12Kg)が4分の1に減る。</p> <p>2段横架の組み方</p> 
<p>乾燥法は掘り取ったら葉を上へ晴天日で2日間地干ししてから上図のような斜め架(片屋根式)に葉を内側に入れてバラでさし込む。また従来の2段横架の場合は地干をさしてから6～10株位ずつ結末して割掛けにして、頂部を古ビニールなどで覆う。乾燥期間は10～15日位</p>	<p>○片屋根は雨による被害が少ない。</p> <p>○地干は葉が上になるように逆立して地面に20株位ずつ寄せ立する。</p>
<p>○葉タバコの乾燥施設を使う場合は晴天で4日位干してからハウスに搬入し葉が日光と風に当たるように葉を外に1.5m位の円形にニオ積みし、次のニオとは50cm以上離す。</p>	<p>○ハウスの乾燥力を過信してはならない。通気には充分注意してムレを防ぐこと。</p> <p>○直接地べたに置かず簀の子か、藁を敷いて積む。</p>
<p>脱葉、調整</p> <p>○半乾生脱乾燥法：地干しして畑で脱葉後にハウス内に薄く広げて乾燥する。</p> <p>水分が15%以下になったら動力脱葉機で脱葉し、ムシロ干し等で更に水分を10%以下とする。</p>	<p>○ときどきかく拌して乾燥にとめる。</p> <p>ハウス乾燥の場合は水分20%で脱葉し、再び葉をハウスで乾燥してもよい。</p>
<p>出荷</p>	<p>良く乾燥したら上葉と下葉に分けて、30kg入り麻袋に包装して出荷する。</p>